インド経済は荒療治凌ぐか

インド統計局は２０１６年１０～１２月期の国内総生産（GDP）が前年同期に比べ実質で７．０%増えたと発表した。減速はしたが、なお主要国で最も高い成長率を維持した格好だ。

事前の予想では６％台に落ち込むとの見方が強かった。モディ首相が１６年１１月に、アングラマネーに対する締め付けなどを目指し２種類の高額紙幣を無効にする「通貨改革」を実施し、経済が混乱してきたからだ。

インドでは現金による取引が圧倒的に多い。そんな社会で、市中に出回っていた現金のおよそ８６％を突然使えなくする荒療治に踏み切ったのだから、さまざまな影響が生じたのは間違いない。

それでも７％台の成長を保ったのはインド経済の底力を示したと言える。ただ、統計局の発表は経済の実態を十分に反映していないのではないか、との指摘が出ていることは注意が必要だ。

インド経済では、政府が把握しきれていない「インフォーマル部門」の存在感がかなり大きい。今回の通貨改革はこの部門を把握しようとする取り組みの一環でもあり、もたらした打撃も比較的大きいはずだが、統計にはあまり反映されていないとみられている。

今回の発表は速報値で、統計局は今後さらにデータを集めて見直していくという。インドの投資環境を改善するためにも、統計の精度を高めてもらいたい。

より大切なのは、今も続く通貨改革の混乱を早く終わらせ、新たな成長の加速に向けた基盤を整えることだろう。鍵を握るのは生産性を高める構造改革だ。

州ごとにばらばらな間接税の統一や過度の外資規制の緩和、インフラ整備への財源の重点配分など、首相が強い指導力を発揮しないと実現できない政策は多い。

モディ首相の人気はなお高いが、通貨改革に対する不満や批判の声は決して小さくない。３月１１日の一斉開票に向けて投票が進んでいる５つの州の議会選挙の結果を、まずは注目したい。